

「落語と私」 その拾伍

三代目 橘ノ百圓

昔から、落語の主題は「飲む、博打、買う」と相場が決っておりますが、平成23年11月に亡くなりました、立川談志師が良く口にしていた「業の肯定」、マア主に、男の業ですがネ。ですから戦時中は、戦意に関わると言う理由で、これらが主眼の噺は「塙塚」に葬られた訳ですが、それは落語そのもの、言い代えれば、人間そのものの否定です。私は別に「業の肯定」と想って演っている訳では在りませんが、少々氣障に言いますと「人間賛歌」を上手く出せたらナッ！「そうそう、人間て、そう言う処が在るよネ、だから楽しいんだよネ」くらいの想いです。話が逸れましたが、先ずは「飲む」から進めたいと思います。「飲む」と言いましても、医者から貰う薬では有りませんヨ！飲む噺は、噺の中に酒の出て来るものも入れますと大分多いですネ。マアそれだけ、一般生活に溶け込んでいるのでしょうか。もっとも、三つの中で現在法的に赦されているのは酒だけですが、噺に出てくる酒飲みは、大概が酒で仕挫ります。読者の中には毎年の様に、書き初めに「禁酒」と書いている方がいらっしゃるかも知れませんネ。と言うほど、酒は止められるものでは在りません。その良い例が「親子酒」の親子です。倅が大の酒好き、しかし、酒癖が良ろしく無い。そこで、父親は倅の将来を案じて、酒を止める様に勧めますが「イヤ、お前ばかりじゃ無い、私も一緒に禁酒をするから・・・」と、二人で酒を断つ約束をするのだが、倅がお得意さん廻りをしている寒い晩、「婆あさんや、何か体の温ったまるものは有りませんか!?」「重湯でも飲みますか!?」と、オカミさんは惚けて酒を出してくれないので、親父はジレて「一杯飲んだら直ぐに寝ちまうから、倅には分りあしないヨ、ネッ、一杯だけ」と、オカミさんに手を合せ、齒の浮く様な世辞を言い、やっと、一杯の酒に有り付く事が出来たのだが、そこは皆様お察しの通り、一杯が二杯、二杯が三杯・・・と、へべレケに成るほど飲んでいる所へ、これまた、ベロベロに酔った倅のご帰宅「お父っつあん、只今帰りました」と、親父の前へ倒れ込む有様、倅に「お前は、どうしてそう酒を飲みたがる」(中略)「婆あさん倅の顔をご覧、酒毒の為に顔が四ツも五ツも有る、こんな化物みたいな者に、この身代は譲れません」「ハッハッハ、俺だって、こんなグルグル廻る家、貰っても仕様がねエ」これも見事な“とたん落”です。これは子を想う親心ですネ。この噺は、やっとせしめた一杯の酒を、一人言を言いながら飲む処から、段々に酔っていくのが聴かせ処ですが、演っていて楽しい噺です。次に酒の噺でも、夫婦の情愛を表わすのが「替り目」です。この亭主は、毎晩の様に飲んで帰る男ですが、シッカリと働いている様です。幕開きに、俵屋から「助けると思って乗ってください」と頼まれて、仕方無く人力に乗り込み、「旦那、何処に遣りましょう!?」と訊かれ、「お前の家行こう・・・」「冗談言っちゃいけませんヨ、取り敢えず、真直ぐ行きましょう」「オウ俵屋、その前にその灯の点いている家の戸を叩いて起こしてくれ!」「エッ！大丈夫ですか？ どうなっても知りませんヨ」と、俵屋が目の前の家を叩くと、まだ起きていたご婦人が出て来て「どうもご苦労さん、何処から乗せたの!?」「エッ！お宅の旦那だったんですか、まだ車あ半分も回っちゃいないんですヨ」「仕様が無いわネ、じゃあこれ少ないけど・・・そんな事言わないで取っというて」(中略)「どうして家の前で俵なんか乗るの!」と、オカミさんは豹変して亭主を叱るが、亭主は、蛙の面

に小便で、平然と「俵屋がいらねエてエのに、どうして銭イ渡すんだヨ、俺が幾ら働いても金が貯らねエと思つたら、皆んな、俵屋に遣ちまうナ」上手い事言いますネ、皆さんの中にも、お金が貯らないのは、奥様が俵屋に上げているのかも!?テか・・・家に上った亭主は、オカミさんを騙す様にして酒を出させるが、酒の摘みが無い、仕方無くオカミさんが「角の“おでん屋”へ行って、何ンか買って来ようか!?”と優しいお言葉「じゃあ頼まア」と、オカミさんが表へ出たと勘違いした亭主が「お前は俺には過ぎたカミさんだ、器量は良いし、気立ては良いし、まるで生きた弁天様だ・・・何ンだ、お前まだそこに居たのかヨ、スッカリ元帳見られちゃった」時間の無い時は、“元帳”と根多帳に記して下りて来ますが、その先が“替り目”となる訳です。オカミさんが“おでん屋”に出掛けている間に“うどん屋”を^{からか}擲^{ひやぎけ}揶って冷酒を出し爛を付けさせ「俺アうどんは嫌エだ」と追い帰し、おでんを買って帰って来たオカミさんが「^{よあきんど}夜商人を擲揶うもんじゃないヨ、私が^{めえ}うどんを食べるから」と、うどん屋を呼ぶ、角のおでん屋の主が、うどん屋に「オウ、あすこの家で、お前を呼んでるヨ」「何処ですか?イヤ、あすこはいけません、丁度銚子の替り目です。」今、中なか^さ落^さげまで聴く機会が無くなりましたが、仕方無いですかネ。可様に酒は簡単に止められるものでは在りません。「酒は百薬の長」とか申しますから、程良く酔って、周りの方に迷惑を懸けないのが一番!

次回も「落語の登場人物」で書きたいと思います。お楽しみに。

